

座頭 (歌へすぐ余波大津絵・かえすがえすおなごりおおつえ)

へひよつくりくひよつくりひよつとまかり出でたるやつがれは  
色にも酒にも目なし鳥どっこいそうは虎の皮禪のはしは取られ  
ても恋の手取りの優法師

へなかその手じゃまいるまい悪洒落な

へ梅に鶯垣に朝顔按摩針まんざら退いた仲じゃない

へ一番相撲でまいるべい引き捨て負い投げ内無双獅子の洞入りほら  
返りエ、畜生めと負け腹で追えどたたけどくるくくる  
くるとア、ほっとしたエ、ままよまわる音頭の一節は

へ花におく露小笹のあられこぼれ易さよ我が涙よいやさア、よい  
やな

へエ、またしてもしつっこい杖振り上げて打たんとせしがイヤく  
くこれでは行かぬと気を変えてコイくくコレわんじやいな  
そのようにわしをじらすが楽しみか主の毛色の良し悪しは目には  
見えねど初雪やその足跡の梅が香の洩れて慕うも遠吠えに声で聞  
き知る私じゃものをあんまりむごいと寄り添えばざれて添い寝の  
仇枕ぞめきも通う紙砧

へ姑嫁ふる嫁下女をふる下女はなアエ釣瓶の縄を振るずいとこきや  
いっかな構うことはねエわしが願いが叶うならば今の浮世に一人  
寝せずに寝ませまいずいとこきやいっかな構うことはねえ狭い浮  
世じゃないかいな

へ我等も浮かれ座頭のぼうおやくくまた悪洒落めが杖と笛盲  
目探しの身は四つ這い後を慕うて走り行く。